（論　文）

子どもの宗教的情操とその表現行為としての遊び
－幼児期を中心に－

角　野　雅　彦

論　文

子どもの宗教的情操とその表現行為としての遊び
－幼児期を中心に－

角　野　雅　彦

和文抄録：本稿の目的は、子どもの宗教的情操を検討することと、遊びをその表現行為として再評価することにある。子ども時代、とりわけ幼児期の子どもは特定の宗教とは無関係にあいまいで原初的な宗教的情操をもっているが、それはいくつかの子どもの遊びに見出すことができる。たとえば古くからの伝統的遊びである、旋回遊び、鬼ごっこ、お葬式ごっこ等、これらの遊びは、一般宗教でいう儀式・儀礼としての側面と意義を有していて、宗教的情感をともなう深い心の癒やしや自己成長の機会を提供する。遊びを通して子どもは非日常的世界に触れ、「死と再生」の過程を経験するのである。

わが国では、子どもの宗教的情操を教育の主題として取り上げることを避けてきた歴史がある。子どもの宗教的情操を重視したフレーベル教育学は、明治期に米国女性宣教師らによって導入されたが、まもなく子どもの発達を第一義とする進歩主義教育諸派に押され、彼の考案した遊戯やその思想は力を失ったのである。

Key Words：子どもの宗教的情操、遊び、儀礼、フレーベル、幼児期

はじめに

子どもの宗教的情操をめぐってはさまざまな意見があるが、子どもと成人の宗教的情操は質的に異なる。幼児期から児童前期にかけての宗教的情操は、特定の信仰対象を必ずしも必要としない原初的な情操である。一般に宗教学では、宗教的情操は、宗教的理念や思想を受け身で理解するだけで形成されるものではないとしているが、保育所や幼稚園の現場や家庭で聞こえてくる子どもの声に耳を傾けると、そうともいえないことがわかる。

子どもは、その宗教的感情をさまざまな遊びによって表現する。いくつかの遊びは、これまでの歴史において神事・宗教儀礼として継承されてきたものと酷似していることがある。それゆえに、柳田国男をはじめとする多くの民俗学者らは、子どもの遊びの中に失われた過去の儀礼の残滓を求めて研究調査を重ねてきた。

子どもの遊びに哲学・宗教的な意味を発見し、子どもの遊びから「生の意義」を探求しようとしたのは、世界最初の幼稚園(Kindergarten)を創立したフレーベルである。彼は子どもの無邪気な遊びに潜む深い神的体験を察し、理性・知性ともに未熟な子どもの内的世界がじつは、根源的生との一体感をともなう驚異の世界であることを説いた。

だが、明治期に伝播したフレーベルの教育学は、当時米国において一大勢力を有していた進歩主義教育諸派とのさまざまな論争の中で次第に消失し、やがて子どもの遊びをめぐる宗教的意義の解釈は、保育・教育の現場においてほとんど関心を持たれなくなった。その状況は今も続いているが、一方で、近年の青少年犯罪の凶悪化などに鑑みて、幼少期からの心の教育、とりわけ宗

教的情操の涵養が重要である、との意見もよく聞かれる。

本稿の構成は、まず幼児期の子どもの宗教的情操とその特徴について考察した第一章、次に宗教的情操を動機とする、または関わりがあると思われる、一般的な遊びをいくつか取り上げて論じた二章。そして最後に、現代日本の保育・幼児教育において「宗教的情操の涵養」がこれまで大きく取り上げられなかった経緯について整理し、今後の幼児期の宗教的情操の涵養教育の可能性について筆者なりの展望を述べた三章、となっている。

1．子どもの宗教的情操の生得性

1）宗教的情操とは

宗教的情操とは、宗教的対象に対する価値をともなう感情的体系を意味する。昨今、地域社会や学校、そして家庭といった、本来、子どもにとっての安全基地であった場所の不安定さが増大する中、宗教的情操の涵養を一つの目的とすることで共同体の精神的統一性を保とうとする動向がみられる。

だが同時に、公教育の現場で宗教を語ることがタブー視される風潮は根強く残っており、そのことが宗教に対する負のラベリングに繋がるとの指摘もある。公教育のこうした態度が宗教に対する無知、無防備、忌避感情の母体となることは事実であろう。

さて、現在の宗教学では、それぞれの宗教にそれぞれの宗教的情操があることを認めるとしても、一般的・普遍的な内容の宗教的情操などというものは存在しないとされている。　そこでは、ある特定の宗教に対する信仰心を持ち、経典に触れ、儀式への参加や日々の礼拝といった宗教的生活の積み重ねから生じるものが宗教的情操であると考えられている。しかしその一方で、英国のマクドゥーガル(William McDougall, 1871～1938)が『An Introduction to Social Psychology 』において述べた、「あらゆる宗教に共通する、普遍的な宗教的情操が存在する」という考えを支持する識者も少なくない。特定の信仰に拠らない宗教的情操を表現する言葉として、わが国では「畏敬の念」が用いられることが多い。

宗教的情操は、「宗教的理念や思想を受け身で理解するだけで形成されるものではない」というのが宗教学の通説であることから、教育現場での「宗教的情操の涵養」には否定的な声が多い。そもそも特定の信仰に自覚的に関わることから形成される情操を学校で教育することは、宗教価値をすり込む行為であり、公教育の精神を逸脱するものだと考えられるからである。[1]そこには子どもの宗教的情操など本来存在しないものであり、自らの自発的信仰を通してか、さもなくば教師や大人によって与えられるというイメージがある。これに対して、じっさいに学校や家庭で子ども達と触れあう教師や大人はどう感じるのであろうか。丹念に見ると、子どもの言動はときに、非日常的世界を連想させるものであったり、宗教的であったりすることがある。また、子どもは大人が思う以上に、自然や生命の生死に対する興味・感受性が強いこともよく知られている。

臨床心理学者の河合隼雄は、「子ども達は日常を超えた大きな存在に気づいていて、また日々発見しているが、無理解な大人がそれを否定することを何となく感じているので、あまり話した

がらない」[2)]という。子どもが気づいているものは、自覚的な信仰から生まれたのではなく、無自覚で生得的な宗教的情操から来たものではなかろうか。そして、耳を傾けてくれる大人を見いだしたとき、子ども達は生き生きとした言葉で、彼らの発見について語ってくれるとして、以下の小学一年生の詩を例に挙げた。

かみさま

やましたみちこ

かみさまはうれしいことも
かなしいこともみなみています
このよのなか
みんないいひとばかりやったら
かみさまもあきてくるんとちがうかな
かみさまが
かしこいひともあほなひともつくるのは
たいくつするからです

この詩の中に、特定の宗教信仰の影響を見出すことはできないだろう。だが、これを書いた少女の「かみさま」は、たしかに彼女のこころに存在している。しかもそれは、自然体で多様性を許容する、ゆったりと構えた神様なのである。

河合は、「やましたさんは小学校一年生なりに、どうして世のなかには、嬉しいことばかりでなく悲しいことがあったり、善い人だけでなく悪い人もいるのだろう、と考え続けているうちに、自分のなかの宇宙に存在する、このような神を見出したのだろう」と解説しているが、ここでの神は、決して誰かに与えられたのではく、自分のなかに見出されたことに大きな意味があるといえよう。自覚的な信仰ではなく、自然で素朴な問いから生まれた「かみさま」は、宗教的であるが、既成の宗教体系に基づく存在ではない。

眼に見えない超越者への想いが綴られるには、周囲の環境、とりわけ大人の態度が重要である。河合も、教師や周囲の大人たちが、しばしば教育や指導という名のもとで、子どものまだぼんやりとした神や宇宙への興味関心を、歪めたり、破壊してしまったりすることを深く危惧している。そして、子どものプリミティブで素朴な宗教的情操あるいは畏敬の念が、しだいに消失していく性質のものであることを憂いて、「私はふと、大人になるということは、子どもたちのもつこのような素晴らしい宇宙の存在を、少しずつ忘れ去ってゆく過程なのかとさえ思う」と述べた。

2）フレーベル教育における宗教的情操

幼稚園(Kindergarten)の創始者フレーベル(Friedrich Fröbel, 1782～1852)の教育思想は、神と自然、および人間との全き統一としての連関である「生の合一」(Lebenseinigung)を果たそうとした点に最大の特徴がある。そしてフレーベルは、生の合一を了解させる心的機能として「予感」(Ahnung)を提唱した。予感とは、フレーベルの教育思想における最も基本的かつ重要な概念の一つであるが、簡単に言うと、それは眼に見えないものへのおぼろげな認識と関心であり、特定の信仰とは別の原型的な宗教的情操を生起させる働きを有している。

またフレーベルは、予感は人間の幼児期において最大限に働くと考えていた。彼は、子どもにおける予感の働きに注目し、経験の乏しい子どもが、幼児期、少年期、青年期と連続的に成長し発展していくためには、感覚や思考力だけではなく、予感能力の働きが重要な意味を持つことを明らかにし、子どもは神や人間の本質をまだ認識できないが、その本質を予感することはできると確信していた。そして、子どもの宗教的情操はこの生得的な予感の能力によってごく自然に獲得されるとしたのである。

主著『人間の教育』の中では、「学校生活を始めることには少年は、自己の精神的本質を知覚し、また神と万物の霊的本質とを予感するように思われる。そして彼は、かの知覚をいっそう明瞭にし、この予感をいよいよ実証しようと努力しているように見えるのである。少年は、この世界の内外に、自分におけると同様な霊が働いていて、世界は自分と同じく、この霊によって支配されているものであるという予感や期待や信仰を持って、外界に接近してゆくのである」[3]とある。このように、フレーベルは、予感が子どもの宗教的情操の源泉であると考えた。

論文『1836年は生命の革新を要求する』においても、「最も内的な条件としては、なによりもまずとくに人間性のうちに宿る神性を感ずることによって生き生きと貫かれた状態にあることである。すべてのものを貫いているその確信と誠実さとは、人間性のうちにみられるあらゆる感情、思考および行為の決定者であり活動基盤であり、またそれらに秩序をあたえるものでありそれらの評価の基準である」[4]と述べている。

ここでは、内在する神性を意識化するというよりは、ただ感じることの方がより重視されていることがわかる。すなわち、情感的でぼんやりとした宗教的情操はそれ自体意味があるということで、たしかに予感的に把握された神的本質を、完全な意識、生きた認識、明瞭な洞察へともたらすことは重要な課題ではあるが、認識以前の、神性に対する子どもの感受性が基盤となって総体的な人間性を形成するということである。

フレーベル教育では、子どもの宗教的情操が、無意味な感覚知覚を素材として始まるとしても、やがてこれらの知覚が知性によって秩序立てられて具体的な信仰に発展することを必ずしも意図していない。むしろ子どもの予感を通して、神的存在全体を一つの意味ある形象物として捉えさせるという、あいまいな把握それ自体を目的としている。さらに、予感によって把握されたものは、やがて明確な信仰に至るまでの過程の中でも消失することはないという。

ドイツの教育哲学者ボルノー(Otto Friedrich Bollnow, 1903～1991)もまた、「予感はまた、

けっして明確な知の中に余すことなく解消されることはない。いつでも暗い基底が保存されている。それはどこまでも秘密に満ちたものであり、われわれの一切の認識は結局のところその中に基礎づけられており、それなしには一切の認識は単なる合理性の中で活力を失うのである」[5]と述べるなど、フレーベル教育における予感によって把握された情感の永続性、およびその重要性を支持している。

このように、フレーベル教育の立場では、子どもの宗教的情操とは、特定の宗教を前提としたものではなく、予感を通したおぼろげな神的存在に対する情感であり、しかもそれは未来において継続し、後の人間形成や信仰心の基調を成すものとして考えられており、前節で述べたような、現代宗教学が定義する宗教的情操、すなわち、ある特定の宗教に対する信仰心を持ち、経典に触れ、儀式への参加や日々の礼拝といった宗教的生活の積み重ねから生じるものとは、その定義、対象が異なることがわかる。フレーベルによれば、子どもはすでに、生得的な意味で宗教的存在なのである。

子どもを根源的存在、すなわち神により近い存在と考えたフレーベルは、われわれ大人たちは、子どもたちとの関わりの中で、瑞々しさを失った日常から解放されて、ときに根源的な生へと戻らなくてはならないと主張した。彼が生前、繰り返し掲げたモットー、「さぁ、わたしたちの子どもらに生きようではないか！」(Kommt, lasst uns unsern kindern leben!)は、表面的な生活の中で硬直した大人たちが、子どもたち、つまり根源的な存在との関わりの中で、自らが再び若返る、根源への回帰という意味を持っている。

3)日本の伝統的子ども観

古来よりわが国では子どもはより神に近い存在と見なされ、しばしば宗教祭事等において神と人を媒介する役割を果たしていた。大人たちは、子どもの何気ない言動に、普段は目に見えない神や異世界の意思とメッセージを感じとってきたのである。このことは、「7歳までは神のうち」ということわざが示しているように、かつて乳幼児死亡率が非常に高かったこととも関係がある。すなわち子どもが神に近いということは、同時に死の世界にも近いということであり、その魂も不安的で境界的存在とされていた。そのため、間引きや堕胎にまつわる罪悪感も、じつはそれほど強くなく、子どもの魂を再びあの世で預かってもらうという意識で行われた。[6]そして7歳以前の幼い子どもの霊魂は、生と死の二つの世界を自在に往来できるものとされ、容易に再び生まれてくると信じられていたので、死んでも葬儀や仏事はなされずに、亡骸が山野に捨てられることは珍しくなかった。

7歳は、幼児期から児童期へ移行する節目の年齢であり、「子供組」に加入するなどして、村落共同体の一員として迎えられた。それまでは、村落共同体の規則に縛られず、自由に振る舞うことが許されたので、大人の監視を離れて遊びの自由を享受することができた。それ以後は、大人たちの見よう見まねで次第に仕事を覚えていき、やがて15歳前後に元服式を行い、大人社会の仲間入りをするのが一般的であった。元服前の子どもは、「童(わらわ)」[7]として、名前や髪型、

服装などで大人とは明確に区別され、男女の性差もないものとして、一人前の「人」として見なされることがなかった。

しかし、わが国の伝統的社会において、老人と女性、そして子どもは、一人前の基準から外れた存在として社会構造の周縁に位置づけられたものの、ある意味では人よりも神に近いとして畏怖される存在でもあった。また、成人の年齢に達しても元服しない「童子」[8]は、社会的には従属的身分であったにもかかわらず、宗教的には特別な役割が付与されていた。彼らは一人前ではないことによって、課役を免除され、タブーとされた空間にも自由に立ち入ることができ、神仏の加護を得て穢れを祓い清めるという聖なる仕事に従事した反面、やがてその異能と姿形から恐れられ、人々の差別と忌避の対象になっていった。

童子のこうした両価的特性は子どもの本質を示すものでもある。各地で伝説に残る「河童」はありがたい水神である一方で、気まぐれに人間に害をもたらす妖怪でもあるが、「童」の文字が当てられており、ここでもわが国の伝統的子ども観を垣間見ることができる。それはこの世の救いと秩序からの逸脱の二面性を示している。

近代以前、子どもは神に近い存在として神聖視された一方で、蔑視されてもいた。だが、今日のように子どもの生活全般を学校や家庭が均一的に管理し、一方的な善意や論理を押しつけることがなく、ある意味、大人たちの無関心の下で、子どもは自由意思に基づいて独自の世界を形成し、遊びを展開していくことができたのである。そして大人と隔絶した世界で子どもたちが築いてきた豊かな文化は、夢、情動、想像力、神話など、宗教性あるいは無意識に相応し合うものが多く、このことが子どもの異質性をいっそう強く印象づけてきたといえる。

社会化されたわれわれ大人の世界は、秩序と常識を強制されるところに特徴があるが、子どもの世界は、現実と非現実、遠くと近く、昼と夜、神や妖怪と人とが常に混在しており、体制的な秩序から自由な点に特徴がある。仏教では、自己と他者、あれとこれといった「分別智」を超えて、宇宙との一体を観想する「無分別智」の瞑想があるが、子どもの世界はまだ分別に絡みとられておらず、ある意味で無分別の状態に近い。

フレーベルは、根源的生命(宇宙あるいは創造主)との合一は、理性(分別智)によっては不可能としたのだが、ここにも彼が幼児の教育にあれほど傾倒した理由があるのではなかろうか。

ともあれ、子どもは世界に対する独特の見方や接し方を持っており、それを失った大人に世界や文化、心の深層を気づかせてくれることがある。「7歳までは神のうち」とは、単に死亡率の高さに由来するだけでなく、子どもが本来的意味において宗教的存在であることを示した言葉であろう。だからこそ、子どもたちは地域における神事祭事で何らかの役割を果たすことが求められたといえる。福田アジオは、「信仰的な意味をもつ年中行事を子どもたちがになうのは、大人たちの関与が後退したからではなく、子どもが神に近い神聖な存在だからである。その神聖な存在に対して、ムラ内の分業として一定の行事を担当させたと解すべきであろう」[9]としている。

2．宗教的情操の表現としての遊び

1）旋回する遊び

輪になって歌いながら旋回する遊びは、典型的な子どもの伝統遊びとして知られているが、旋回遊びはわが国だけでなく世界中で広く見られる遊びである。たとえばイギリスのマザーグースでも旋回遊びがいくつかある。代表的なものに" Rin a Ring o' Roses Rin a Ring o' Roses"がある。以下の唄を口ずさみながら、子どもたちが手をつないで輪になって回る遊びであり、イギリスをはじめ英語文化圏では広く遊ばれている。

原文

" Rin a Ring o' Roses Rin a Ring o' Roses"

Ring, a ring o' roses, A pocket full of posies,

A Tishoo, atishoo, We all fall down.

邦訳

"バラの花輪だ　手をつなごうよ"

バラの花輪だ　手をつなごうよ,

ポケットに　花束さして,

ハクション！　ハクション！

みんな　ころぼう。

この唄の起源には諸説あるが、1665年からその翌年にかけてロンドンで大流行したペスト[10]に由来するとする説がある。「バラ」はペストの症状の赤い発疹、「花束」はペストを防ぐための薬草の束、「ハクション」は病気の末期症状を意味しており、そして最後の「みんな　ころぼう」は全員死んでしまうというものである。なお、イギリスではこの説が広く知られていて半ば定説となっている。その他には、イギリスだけでなくヨーロッパ各地にバラの花が出てくる旋回遊びの唄が伝わっていることから、この唄の起源はペストではなく「五月祭」で飾られたバラの花輪の名残であるという説もある。

「かごめかごめ」はわが国の代表的な旋回遊びであるが、民俗学では大人たちが行ってきた信仰行事の名残だとする見方がある。また、東北地方では「地獄遊び」という旋回遊びが長く伝承されてきた。この遊びは、一人の子どもに南天の木の枝を親指を隠した状態で握らせ、その子を取り巻いた他の子どもたちがぐるぐる廻り「お乗りやあれ地蔵様」と何度も唱える。やがて中心の子どもは地蔵様となり、旋回する子どもたちは「物教えにござったか、遊びにござったか」と楽しく歌い踊る。柳田国男は、かつて実際にこの地方で広く行われた「神の口寄せ」や「地蔵つけ」を模倣した遊びであると考えていた。[11]

しかし、柳田が子どもの遊びに注目するのは、過去の信仰や生活の残滓を知るためであり、子

どもがなぜその遊びをするのか、その遊びにどんな意味があるのかといった点ではない。外見において宗教的な遊びが、はたして子どもの内的世界、宗教的情操の表現行為としての意義を有しているかについて、ほとんど関心を持たれていないのである。

これに対して、本田和子はフレーベル同様、子どもの遊びに普遍的な意義や人間所為の原型を見いだそうとした。「子どもの遊びを、すべて原始信仰の残滓とする見解に与しない。人々が呪術を信じなくなったために、神ごとの神聖さが薄れ、結果としてそれが遊びに転化し、子どもの手に渡されたと考えないのである。『神おろし』と『かごめかごめ』とが『動きの原型』を共有するとすれば、そこに人間のイメージの普遍性を見るべきではないか。そして同時に、それは『神おろし』と等しく、子どもの遊びもまた、非日常的位相で把握すべきものであることを物語ってもいるのだ」[12]と述べている。つまり、輪になってぐるぐると循環する動きは人間の普遍的かつ原型的動きであり、また、日常とは一線を画した聖なる行為、すなわち宗教的体験として理解せねばならないということである。

「かごめかごめ」でまるくなって円陣をつくるとき、中心にいるのは鬼にせよ地蔵様にせよ、何らかの聖なる存在であり、こうして外界に対して結界を張ることになる。そして子どもたちは円を廻ることで、それぞれが聖なるものから等距離にあるメンバーとして一体化することができる。これはきわめて宗教的な行為であるといえよう。宗教は英語でreligionだが、「re＝再」「ligion＝結合」であり、本来は再結合という意味をもっている。これには聖なるものとの、そして、それを信じる成員間での再結合という二重の意味がある。つまり「かごめかごめ」というこの遊びがほとんど形を変えず今に残っているのは、中心を囲んで円を廻ることがもたらす再結合の感覚であり、それが子どもの心に深い満足感を与えるからだと考えられる。信仰がもたらす幸福感と大きく隔たるものではない。

さらに本田は、われわれ大人の時間概念は過去から現在未来へと続く恒常直進的なものだが、子どものそれは大人とは異なり、たえず「聖なるものによって浄められ、それゆえの更新をくり返しつつ、めぐり続ける」ものであり、「不断にくり返される『死と再生の過程』」[13]であるという。たしかに子どもの遊びは限りなくくり返されるという特徴がある。「かごめかごめ」でも鬼が次々と交代しながら遊びそのものは続くが、それは伝統的な宗教祭事についても同様である。聖なる祭事が行われると時間はリセットされて、再び新しい時がはじまる。こうして時間の死と再生をくり返すことによって、祭事は存続することができたのである。

2）鬼ごっこ

民俗学の通説では、「鬼ごっこ」の語源は「鬼事（おにごと）」であり、事は神事や儀礼を意味するとされる。この遊びの特徴は一人の鬼が大勢の相手と対しながらも、圧倒的に優位な立場で追いかけて捕まえるところにある。恐るべき者の追跡と、おびえる者たちの逃避をくり返すこの遊びの起源は古く、平安時代に恵心僧都（源信）が作った遊びとされる「比比丘女（ひふくめ）」という「子とろ遊び」が起源という説があるが、多田道太朗は、「近、現代の 遊び、たとえばマー

ジャンにしても十七世紀の中国ということしかわからない。まして、古いにおいのする子供の遊びにいたっては、特定個人の発案に比定するほうが奇異にすぎる」[14]と疑義を唱え、自生説を提唱した。これに賛同する飯島吉晴も、「実際、この遊びは朝鮮半島からアジアを経てヨーロッパ、アフリカまで分布し、鷲やオオカミが雛鶏や子羊をねらい、雌鶏や母羊がこれを守るという形式で一致しているといわれ、日本の比比丘女もそのヴァリエーションの一つであることが最近わかってきている」[15]という。

また、1560年のブリューゲルによる絵画「子供の遊戯」は、16世紀半ばのフランドル地方(ベルギー西部からオランダ・フランスの一部を含む地域)を舞台に分布していた当時の子どもの遊びを描いた作品であるが、そこにも「子とろ遊び」に類似した遊びが見られる[16]など、時代や民族を超えて自然発生した遊びである可能性が高い。

多田は、「子とろ遊び」の根底に、世界中に点在する子をさらう「子とり」の妖精や神隠しの信仰があると考え、その裏付けとしてアメリカ先住民ズニ族のカチーナ神を取り上げた。水底都市に住むカチーナ神は、祭りでは人々を楽しませる善神である。だがその一方で、災いをもたらすという両義性をもっている。カチーナは、魅惑的な舞で人々を惑わせ死者の国へ連れて行く悪神でもある。多田は、神々に魅惑されて行方不明(神隠し)になることが、「子とろ遊び」や「鬼ごっこ」、そして「かくれんぼ」の原型にあると推定し、その背後には、俗から聖への移行、死と再生を経験するイニシエーション(参与儀礼)が反映していると考えていた。[17]

元来、宗教は人々の「生まれ変わり」願望に対して、さまざまな儀礼や「ハレの場」を提供してきた歴史がある。信仰は、硬直化した日常からの逃避と聖化、そして帰還というプロセスを動機として成立している。そして子どもの遊び「鬼ごっこ」には、過去の信仰生活の模倣や残滓が見られるにしても、自由自在に非日常的位相に参入し、また戻ってくるというきわめて宗教的な願いが投影されているのである。また、「かごめかごめ」「鬼ごっこ」など、異界体験の要素が含まれる遊びは、その地方の文化、民族性、時代を反映して外形こそ異なってはいるが、そこで経験する内的充足には原型としての共通点がある。これこそが、すべての子どもにプリミティブな宗教的情操が存在することの証左である。

3)お葬式ごっこ

死者を弔う葬儀は、古代から現代に至るまで、あらゆる宗教が担ってきたきわめて重要な儀礼の一つである。人の死に限らず、程度の差こそあれ、すべての愛情対象の喪失には、時間と感情の整理が必要であるが、葬儀は、周囲の人々が事実を事実として受け止め、混乱した感情を整えるためのグリーフワークである。またそれは、古い世界と決別し、新しい世界へと旅立つためことを意味する。言い換えれば、死と再生の営みでもある。

一見すると大人社会の葬儀を模した遊びである「お葬式ごっこ」は洋の東西を問わず子どもの間で昔から広く見られる遊びとして知られている。たとえば、フランス映画『禁じられた遊び』(1952)では、「お葬式ごっこ」をする幼い子どもの姿が描かれている。

この映画の主人公の一人、戦争のためパリから田舎へ疎開する幼い少女ポーレットは、母親をドイツ軍の銃撃掃射で失う。避難民の列から離れ、死んだ小犬を抱いて彷徨っていた彼女は、農家の少年ミシェルと出会い少年の家で一緒に暮らすようになる。

二人は兄弟のように仲がよかったが、ポーレットは母親を失った悲しみからどうしても立ち直ることができない。ある日ミシェルに手伝ってもらい、水車小屋の土間に穴を掘って小犬を葬ろうとするが、「小犬は一人ではきっと寂しがる」と言う。ミシェルが「小犬の墓の周りに他の動物や虫のお墓を作ろう」と提案したことから、二人はネズミや昆虫の死体を集めて木片で十字架をこしらえ、小さなお墓を作って遊ぶのである。

激しい戦争のため、母親の十分な葬儀もできずにいたポーレットは、自身の感情の整理をつけられないまま悲嘆に暮れるしかなかった。失われた愛情対象の弔いが疎かにされると、死者に対するイメージの死と再生の過程がうまく機能せず、悲しみは決して癒えない。彼女には、その癒えない悲しみや孤独を整理するために、どうしても「お葬式ごっこ」が必要だったのである。

この映画を精神医学の観点から考察した森省二は、「幼い少女ポーレットは自分でかわいがっていた小犬の墓を作ることで、しかも繰り返し作ることで、自分なりに最愛の対象を喪失したという事実を受け入れようとしていたのである。もちろん小犬は母親の象徴的代理物である。ポーレットは小犬の墓を作り弔うことで、実は母親への思いを整理しようとしていたのである」[18]という。

映画の最後では、ポーレットはミシェルの家を離れ孤児院に連れて行かれてしまうが、これは、彼女が過酷な現実を生きていく上で不可欠な「悲哀の仕事」、すなわち「お葬式ごっこ」を完了させられなかったことを意味している。さらに森が、「『悲哀の仕事』を十分なし終えていない彼女は、孤児院でもまた、人知れず墓作りをしなければならないだろう。今度は、誰とするのであろうか。もし墓でなければ、それに代わる何か弔いの儀式を必要とする。さもなければ彼女はいつまでも泣き続けなければならない」[19]と述べるように、「お葬式ごっこ」は、彼女にとって大人の葬儀を模した単なる遊びではなく、死と再生の儀礼である。その未完結が、彼女のその後の人生に影を落とす。映画『禁じられた遊び』は、遊びが子どもにとっていかに大切なものであるかを訴え、その意義を問うている。

森は、「悲哀の仕事」がないがしろにされた結果、突然夜泣きの激しくなった幼稚園年中女児（H子）の事例[20]を報告している。それによると、H子は、森との遊戯治療の過程で箱庭に金魚の墓を作るようになったが、そこには以下のような背景があった。

H子の家は金魚を数匹飼っていて、ほとんどが赤い、安物ばかりであったが、その中に一匹黒い大きな金魚がいて、H子はその金魚を「クロ」と名付け金魚のお父さんと思っていた。一年以上生きていたが、ある朝H子は「クロ」が死んでいるのを発見した。急いで母親に訴えたが、母親は朝の一番忙しいときで、内職も仕上げなければならなかったことから、後でみてあげると言って、H子を幼稚園に送り出した。

幼稚園から帰ったH子は「クロ」のことを尋ねたが、母親はすでに生ゴミと一緒に片付けた後だった。彼女は「クロ、死んじゃったの。クロ死んじゃったの」と繰り返し聞いたが、母親は「天国へ行っちゃったよ」と言って済ませてしまった。

（森省二『子どもの対象喪失-その悲しみの世界-』より　92-95頁を要約）

大人にとっては些細なことでも、子どもにとって金魚は命ある「家族」の一員であり、その死をもって生ゴミと一緒に捨てられたのでは堪らない。家族の死には死と再生の儀礼「お葬式ごっこ」が必要だったのであるが、母親は無視した。森が、「もし母親が彼女と一緒に庭の隅にでもお墓を作り丁重に葬っていたら、たとえ悪夢から夜泣きが起こったとしても一日か二日で、それほど長く続くことはなかったであろう」[21]と述べているように、子どもは幼くとも愛情対象の喪失を驚くほど重く受け止め、また、その感情の整理には大人と同様に何らかの宗教的儀礼を必要とすることがわかる。

H子が「クロ」をかけがえのない唯一のものとして日々愛おしんでいたことは容易に想像できるが、そもそも個々の命を代替不可能で大切なものとして扱うことは、道徳やその基底にあるさまざまな宗教が共通して説いてきた教義である。森の記述からは特定の信仰と無縁のH子が、「クロ」の死の悲しみをお墓を作ることで乗り越えようとしている姿には、特定の宗教とは無関係に、あるいはもっと根源的な宗教的情操を垣間見ることができる。

最後に付け加えると、子どもの悲しみは思いがけないことから引き起こされることがある。大事にしている人形やおもちゃはもちろん、家財道具や自家用車、ときには庭で死んだ小動物の死骸など、普段は直接関わりのない対象が引き金になることもある。

私事で恐縮だが、筆者の娘が年長児の頃に、自宅の庭ですずめが死んでいるのを見つけたことがある。家で飼っていたわけでもないが、彼女はその「名もなきすずめ」の死を嘆き悲しんだ。そして自らお墓を作り、石の墓標に「すずめさんのおはか」と書いて、すずめの亡骸を丁寧に葬った。

3．学校・保育現場での「宗教的情操の涵養」をめぐって

1）初等・中等教育の場合

1947（昭和22）年に交付された教育基本法第九条では、「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない」としている。この条文からみても、宗教教育の重要性が十分認識されていることがわかる。また、学校教育において宗教は、道徳あるいは文化の一部として考えられており、初等・中等教育では道徳や社会科の時間に触れられることが多い。

しかし、わが国の教育現場では思想および価値の中立性が求められ、特定のイデオロギーは排除される傾向がある。とりわけ宗教は人間の精神生活の基盤をなすものであり、同時に個人の内面の自由を保証する法的見地からも、現場は宗教を教育内容として取り上げることにきわめて消極的であった。宮坂広作が、「そもそも近代教育、とくに公教育では、イデオロギーにかかわる教育を回避して、客観的・実証的な知識が教授（instruction）されるという基本的な傾向がある」[22]とするように、西欧諸国においては、長い宗教戦争の不幸な歴史を経て近代に至り、ようやく政教分離・信仰の自由を獲得した経緯がある。

これを模した日本国憲法および教育基本法は、憲法第二十条にて、信教の自由と国の宗教活動

の禁止を規定し、教育基本法の第九条二項でも、国公立の学校では「特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない」と定めている。だが、ここでは「特定の宗教のための」理念や意図が介在する教育、すなわち「宗派教育」が制限されているのであって、宗教教育全般ではないことには留意する必要がある。そもそも教育基本法そのものは、宗教に関する寛容な態度を養えとか、宗教の社会的意義について敬意を払うようにせよとか、宗教に対して親和的な立場を示している。また、憲法の政教分離も、個人の信仰の自由を尊重するために、政治権力の介入を戒めたものであると解釈される。

しかし皮肉なことに、宗教が個人の内面の問題であり、主観的価値判断にかかわる事柄であることが、教育実践ではきわめて扱いにくい結果を生んでいる。 そこで、現場教師としてはリスクを避けるべく、なるべく宗教に触れないようにしているのが現状である。仮に教師がなんらかの宗教の信者であれば、特定の「宗派教育」を行ったという疑惑をもたれる可能性もあり、宗教に関心のない大部分の教師は、このようなリスクをあえて負うことを当然ながら避けるであろう。また、「宗教的情操の涵養」という言葉についても、特定の信仰生活や行事への参加、すなわち「宗派教育」によって育まれるとする主張が強くあり、このことも宗教的中立性をモットーとする国公立学校が、宗教教育に踏み込めない理由の一つだといえる。

だが戦後、青少年の非行、モラルの低下、心の荒廃等が問題視されるようになり、倫理道徳を支えるものとして宗教が見直されるようになった。キリスト教をはじめとする宗教系私学の人気隆盛ぶりも背景にあったと思われるが、国公立学校においても、宗教的情操の涵養を明記することが求められるようになったのである。そこで、1966（昭和41）年10月31日の中央教育審議会答申の別記「期待される人間像」では、「生命の根源すなわち聖なるものに対する畏敬の念が真の宗教的情操」としてあげられた。その後、1986（昭和61）年４月23日の臨時教育審議会による「教育改革に関する第二次答申」では、「人間の力をこえるものを畏敬する心」というふうに表現を変えている。

そもそも学校は知識や技術を伝える機関として存在してきたのであって、情操教育は家庭や社会の課題であるという考え方もあるが、だからといって学校が、情操教育を二の次にしてよいということにはならない。しかしその実践は、学校の性格上、どうしても「宗教知識教育」を通じての情操教育になるであろう。そして宗教知識を教授するとき、特定宗派の教義、儀礼、歴史の解説は避けられず、そうすると「宗派教育」との境界が曖昧になる、という批判も当然出てくると予想される。

問題は、「畏敬の念（心）」の指す「宗教的情操」が、特定宗教の信仰実践から生まれる「宗教的情操」と混同されているところにある。前者が意味しているのは前宗教的（プリミティブ）な宗教的情操であり、理性や知識を通しては逆に把握しがたい情操なのである。したがって、言語を伝達ツールとして教授することを主とする初等・中等教育において教育のねらいとするには無理が生じるし、情操の自発性と自由度を歪める危険もある。

長田新の宗教教育を論じた宮坂[23]は、彼（長田）の宗教教育の目的は、「宗教を人間性の限界内

に導き返すことであり、万物のうちに神を見いだし、聖なるものの感受・認得を助長することだ」と述べ、宗教教育の方法についても、「教義（Dogma）や宗教知識のような概念の伝達を排し」とするなど、長田が「宗教知識教育」に批判的であったことを示す。そして教育方法の前提として考慮すべきは、「シュライエルマッヘルの言った、聖なるものへの『感知力』、つまり経験的なもののうちに超経験的なものの意義と根抵をとらえる力を養うこと」であるという。フレーベルの教育思想とも重なるところが多いが、「概念・悟性・理性ではとらえにくいデモーニッュなものを純粋感情で直覚すること（ゲーテ）、『驚異』こそが原始的な宗教感情」であるなど、長田の宗教教育論は、「畏敬の念（心）」を推す人々には容易に受け入れられるものであろう。だが、その目的・方法ともに、現在の初等・中等教育機関ではその実践の困難が予想される。むしろそれは、理性・知性が支配的でない環境、たとえば保育所や幼稚園において、幼児を対象に展開するべき教育ではなかろうか。

2）保育所・幼稚園の場合

わが国の近代保育・幼児教育はフレーベル教育の受容から始まった。子どもの生命に等しく内在する神性に注目し、内在的成長を自発的に遂げることに教育の真髄をみたフレーベルは、幼児期にみられる特徴的な宗教的情操を重視しており、子どもたちが遊びを通してその情操を表現することを知っていた。そして幼児期の教育には、「発達」のための働きかけより、まず何より子ども期の「充足」が大切であるとされた。

ちなみに、彼が多大な影響を受けたとされるドイツロマン主義文学にも「子ども賛美」の傾向がある。フレーベル晩年の著作『母の歌と愛撫の歌』(Mutter und Koselieder, 1844)では、表紙の扉上に「さぁ、私たちの子どもらに生きようではないか！」(Kommt, lasst uns unsern kindern leben!」というモットーが掲げられているが、それとともに、シラー(Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759～1805)の句「無邪気な遊びにもしばしば高い意味がある」が付されている。ここでの「高い意味」には、大人とは異なる子どもの宗教性が含まれている。

「ロマン主義教育」とも称されるフレーベルの幼稚園と教育思想は、その後ヨーロッパからアメリカに広まり、そして明治期に日本に伝えられた。フレーベル教育を日本に伝えたのは、主に米国のキリスト教女性宣教師[24]であった。

だがその一方で、彼女たちはデューイ(John Dewey, 1859～1952)らによって「新教育運動」として展開された進歩主義教育にも高い関心を持っていた。進歩主義教育の思想は、人間に対する理想主義的理解を有し、同時に進化論的科学理解に基づいた発達を求める点に特徴があり、加えて個々の発達そのものが、社会の進歩発展にも繋がっていくよう求める社会主義的側面を持っている。

そもそも子どもの発達を最優先し、客観性と評価を重んじる進歩主義教育の立場からは、宗教的情操は課題として成立しにくい。また、フレーベルが重視したおぼろげな宗教的情操、現代で

いうところの畏敬の念などは、自然崇拝や汎神論的世界観に通じるものがあるが、これらは宗教の発達史上、古代社会においてみられる特徴である。よって仮にこれらが子どもの遊びの中に見出されるとしても、「個体の発生は系統発生を繰り返す」とする発生反復説、ダーウィニズムを旗印とした発達論者たちからすれば、個人にとっても宗教史的にもごく初期段階の宗教的情操の表れに過ぎず、むしろ特定の宗教信仰に基づく宗教的情操の涵養を促すことが、宗教教育としてあるべき姿となる。このこともまた、保育・幼児教育において宗教教育が大きな議論にならなかった原因の一つであろう。

米国ではフレーベル主義の理解と方法論をめぐって、従来のそれを固守すべきとする保守派のブロー(Suzan E. Blow, 1843～1916)、進歩主義的教育の理解に基づいて再解釈しつつ保育に取り入れようとする進歩主義派のヒル(Patty Smith Hill, 1868～1946)中立派のハリソン(Elizabeth Harrison, 1849～1927)らの間で1880年代の終わりから米国で論争が始まったが、論争は、進歩主義派の代表であるヒルの勝利に終わった。[25]

明治期の米国女性宣教師たちは、本国でのこうした動向に敏感であり、さまざまな影響を受けながら日本での保育を展開していったが、じっさいの保育においては進歩主義の考え方を取り入れ、フレーベルの考案した「恩物遊び」や歌遊びの割合は次第に減少していった。彼の子どもの自発性を重視する教育精神は信奉されつつも、遊びの意味に対する解釈、子どものプリミティブな宗教性を重視する側面などは抜け落ちていった。遊びは、年齢ごとの精神、社会性発達のための単なる手段に変容していったのである。

婦人宣教師は保姆養成所の設立にも尽力したが、附属の幼稚園が行った保育は、後継者養成を目的とした点で、その後のわが国の幼児教育・保育全体に継続的な影響を及ぼし、今に至っている。とくにハウ(Annie Lion Howe, 1852～1943)は、優れた保姆の養成を急務とし、1889(明治22)年10月22日、幼稚園の開園(同年11月４日に開園)に先立って、２年制の頌栄保姆伝習所を開設している。当初のハウはフレーベル信奉者であったが、やがてフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』と『人間教育』を幼児教育における理論的かつ精神的支柱としてフレーベルの哲学は継承しつつも、進歩主義教育とそれに基づいた教育法を取り込んでいくという、ある意味で非常に困難な教育を実践するようになる。ハウの選択は、当時それほどまでに進歩主義教育の影響力が強かったことを物語っている。

フレーベルの創設した幼稚園(Kindergarten)は、子どもが生来的に宗教的であるという事実から出発し、遊びについては、その内在する意味を深く考察する点に特徴がある。子どもの発達を促すことが教育の目的ではなく、その活動を見守り、そして子どもから学ぶという「消極教育」が基本となっている。子どもの宗教的情操の涵養については、大人が教え与えるのではなく、適切な環境の下で子どもは自ら遊びや生活を通じてその宗教的情操を発現し、内的成長を遂げるという考えである。

だがこれまで述べたように、幼児期の宗教的情操を重んじたフレーベル教育は、そのままの形で日本に伝播することはなかった。草創期の米国女性宣教師たちがダーウィニズムと進歩主義教

育の影響を強く受けたことから、本来のフレーベル主義とは異なり、子どもの心理社会的発達を無視できなかった。進歩主義教育はその後、自由遊び、プロジェクト型メソッド、など、これまでさまざまな保育指導法やカリキュラムを生み出したが、その根底にあるのは発達を第一義とする教育である。そのため、宗教系私学はべつにして、一般の保育所・幼稚園における子どもの宗教的情操の涵養については、ほとんど議論されてこなかった。就学前の保育・教育は、大人の目に見える部分において、子どもの成長発達を考え、その援助・教育に傾注するだけでよかったのである。

3）宗教的情操が育つ環境 ～結びにかえて～

幼児期の宗教的情操は、大人の自覚的信仰から形成されたそれと異なり、無意識的で、理性・知性が支配的でなく直観的であるという特徴がある。宗教知識の教育は幼児期には不向きであるが、感覚を通して自然に吸収される「経験」は、情操をさらに豊かにすると考えられる。また、これまで述べてきたいくつかの遊びは、大人社会の宗教儀礼とも共通点の多い、原初的な宗教感情の表出とも考えられるが、そうした遊びが大人による制限を受けることなく、許され、自由に展開できる環境の存在はきわめて重要である。

とりわけ人的環境、保育者の信条体系のコアである人間・人生観、宗教観、生命観などは、子どもの宗教的情操を育むと同時にそれを大きく歪める可能性さえ有している。たとえば、理由もなく生き物の命を奪ってはいけない、すべての命を尊ぶ、ということに異議を唱える保育者はいないだろう。だが、「どうして生き物を殺してはいけないのか」子どもから問われたとき、「法律で禁じられているから」と「神様が見ている、罰が当たるから」と答えるのでは、子どもが受け取る印象はずいぶん違ってくる。

現在、一部の宗教系私学を除いてほとんどの保育者・教員養成校では、宗教的中立性を維持するという名目もあって、宗教に関する教職科目は設置されていない。宗教は「道徳教育指導法」などで触れられる程度であるし、毎年、新規に保育者・教員となる者の多くは無宗教である。

しかし、2万人近い犠牲者を出し、多くの町が壊滅的な打撃を受けた東日本大震災(2011年3月)以後、保育・教育の世界でも、命といかに向き合うかという問題がいっそうクローズアップされてきている。そしてこれまで日常生活から遠かった諸々の災害が、これを境に身近な問題になったことを、大人同様、多くの子どもたちは感じている。

震災を直接経験しなかった子どもでも、テレビで繰り返し流される津波、そして放射能の影響など、この世界に漠然とした不安を抱いている。だが、子どもに現実を語るのは容易ではない。というのは、そこに多くの理不尽な死が絡んでいるからであり、それを事実として語ったとしても、子どもは決して納得、安心できないであろう。なぜなら彼らが求めているのはじつは実存的、宗教的回答だからである。

子どもの宗教的情操は、最近心理臨床やターミナルケアなどの場面でしばしば用いられるスピリチュアリティ(Spirituality,霊性)に近い。スピリチュアリティとは霊魂や神などの超自然的

存在との見えないつながりを信じる、または感じることに基づくが、必ずしも特定の宗教に根ざすものではなく、普遍性、共通性を志向する概念である。

先述したように、わが国の保育所・幼稚園は、一部の宗教系私学は別にして、子どもの心情・意欲・態度の育成に傾注し、霊性にはこれまでほとんど関心を向けなかった。保育者が子どもの遊びにスピリチュアルな要素を見出しても、それは心理発達的意味に置き換えられ、子どもの宗教的情操の涵養は保育のねらいとして取り上げられなかったのである。そしてこうした大人の関心の薄さは伝染する。こうしてやがて、子どもは豊かな霊的感性を自ら封印していくのかもしれない。

それを踏まえて保育現場では、自らのスピリチュアリティを体験している子どもが自分を大切にしながらその遊びに没入できるよう寄り添い、見守りの環境を提供することを心がけてほしいと思う。その前提として、子どもの遊びを見るときに、保育者はスピリチュアリティという新しい視点をもつことが求められる。かつてフレーベルが述べたように、子どもが本来霊的感性に富んだ存在であることを認め、遊びがときにその表現行為であることを意識しつつ注意深く関わることが必要である。そしてこのような保育者が、子どもの宗教的情操を涵養する人的環境として機能するためには、保育所・幼稚園管理職の子ども観の見直しも不可欠であろう。

保育者養成校の教育課程と内容もきわめて重要である。子どもの宗教的情操について考えるにも基礎的教養が必要であるが、現在多くの養成校では保育実技の習得や実習教育に多大な時間を割いているものの、一方で基礎教養科目の割合は年々減少している。広い意味での人間力を培う哲学、文学、倫理学といった教養科目の軽視は、単なる保育の技術屋を養成することにも繋がる。子どもだけでなく保護者、そして社会が求めている保育者の専門性は、歌遊びや絵画制作の巧みさだけではない。子どもの遊びに多様な意義を見出す観察眼、また近年その役割が増している保護者支援の場面などでは、技術というより教養を土台とした保育者の人間力が問われるのである。

なお、今回は紙数の関係上取り上げられなかったが、東日本大震災の被災地からは、グリーフワークとしての遊びの事例が多く報告されている。大切なものを失った悲痛な体験を通して、その喪失の意味と新しい生を生き直す勇気を、子どもたちは遊びから見つけようとしている。そのような遊びは極度のストレスや不安から来る感情の表現というだけでなく、死と再生を願うきわめて宗教的な儀礼として理解されなくてはならない。

注

1）教育基本法第９条（宗教教育）によれば、宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならないことから、「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない」とされている。
2）河合隼雄（1987）『子どもの宇宙』岩波書店
3）フレーベル著、小原國芳訳(1976)『フレーベル全集』第二巻 玉川大学出版部 150-151頁
4）フレーベル著、小原國芳・荘司雅子監修(1977)前掲書 第三巻 玉川大学出版部 552-553頁
5）長井和雄他編(1986)『ロマン主義教育再興』東洋館出版社 7頁
6）間引きや堕胎は「もどす」とか「かえす」と表現されることもあった。死んでも子どもはまた甦ってく

るという、農耕社会的な生命・盤魂観が根底にある。

7）元来、奴隷身分の者を表す漢字であった「童」だが、日本では元服式を受けていない者を意味している。古代社会では、戸座をはじめ、神社の小物忌や火焚き童女など、水火を司る者は年少の「小童」と定められていた。

8）天皇や神仏など超越的存在の僕として、呪術、御輿担ぎ、牛馬の管理などに従事していた者。成人でありながら髪を結わずに垂らした童形の髪型をしていた。

9）福田アジオ(1977)「子ども組とムラの教育」『子ども組』(フォークロアの眼４)図書刊行会 119頁

10）ロンドンでのペストによる死者は、最終的に約10万人に及び、１日で6000人が死亡した日もあったという。『ロビンソンクルーソー』の著者ダニエル・デフォーは、『疫病の年』(A Journal of the Plague Year, 1722)で当時の悲惨な状況を克明に描いている。

11）柳田国男(1962)「こども風土記」『定本柳田国男集』第21巻 筑摩書房 10-12頁。福島県いわき地方、相馬地方では戦前、大正末期頃まで「神おろし」が行われていた。中心に神がかりとなるノリテ(多くは女性)をおいて周囲の大人たちが呪文を繰り返し唱えると、ノリテはやがて神憑りとなり、人々の悩みや質問に答えるという。

12）本田和子(1980)『子どもたちのいる宇宙』三省堂 100頁

13）本田和子　前掲書　105頁

14）多田道太郎(1974)『遊びと日本人』筑摩書房 148~149頁

15）飯島吉晴(1991)『子どもの民俗学』ノマド書房 99頁

16）大森隆子(1995)『保育のための“遊び”研究考(VII) -「子とろ子とろ」について(下)』豊橋短期大学紀要第12号 136-137頁

17）多田道太郎　前掲書　143-145頁

18）森省二(1990)『子どもの対象喪失-その悲しみの世界-』創元社90頁

19）森省二　前掲書　91頁

20）森省二　前掲書　91-99頁

21）森省二　前掲書　98頁

22）宮坂広作(2005)『宗教教育管見-仏教保育論を中心に-』京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究 vol.4 132頁

23）宮坂広作　前掲書　137-138頁

24）婦人宣教師が設立した保姆養成所に設けられた幼稚園が行った保育は、後継者養成を目的とした点で、その後のわが国の幼児教育・保育全体に継続的な影響を及ぼしたといえる。とくにハウ(Annie Lion Howe, 1852～1943)は、優れた保姆の養成を何よりも急務と感じ、1889(明治22)年10月22日、幼稚園の開園(同年11月４日に開園)に先立って、２年制の頌栄保姆伝習所を開設している。

25）ブローとヒルは、コロンビア大学のティーチャーズ・カレッジでも幼稚園教育に関する講義を行ったが、結局、ブローは、ヒルによって論破され、論争は、進歩主義派の代表であるヒルの勝利に終わった。

参考文献

飯島吉晴(1991)『子どもの民俗学』ノマド書房

大森隆子(1995)『保育のための“遊び”研究考(VII) -「子とろ子とろ」について(下)』豊橋短期大学紀要第12号

角野雅彦(2006)『19世紀後期におけるキリスト教主義保育の受容と展開－宣教師たちの活動を中心として－』四国学院論集123号、四国学院文化学会。

角野雅彦(2007)『フレーベル教育学における「予感」と象徴遊戯論に関する一考察』四国学院論集124号、四国学院文化学会

河合隼雄 (1987)『子どもの宇宙』岩波書店

多田道太郎(1974)『遊びと日本人』筑摩書房

長井和雄他編(1986)『ロマン主義教育再興』東洋館出版社

福田アジオ(1977)「子ども組とムラの教育」『子ども組』(フォークロアの眼４)図書刊行会

フレーベル著、小原國芳訳(1976)『フレーベル全集』第二、三巻 玉川大学出版部

本田和子(1980)『子どもたちのいる宇宙』三省堂

森省二(1990)『子どもの対象喪失-その悲しみの世界-』創元社

柳田国男(1962)「こども風土記」『定本柳田国男集』第21巻 筑摩書房

Children's religious spirituality and their behaviour at play with focus on early childhood

Masahiko Kakuno

The purpose of this paper is to discuss religious spirituality in children and to re-evaluate their behaviour at play with this in mind. During childhood, particularly in the early years, children have a vague, innate sense of morality that does not relate to any specific religion and that can be seen as they play.

For example, games such as spinning, tag, funeral games etc. not only contain religious elements such as ceremony and courtesy, but also offer opportunities for self-growth; encouraging them to recover quickly from disappointment, overcome setbacks and to consider others. Through play and experiencing the process of death and rebirth, children are exposed to an adult world that they have yet to experience.

In our country, we have historically avoided taking up morality in children as a topic of education. Although Froebel pedagogy, which emphasises the innate morality of children, was introduced in the Meiji period by American female propagators, it was soon overwhelmed by progressive education schools and Froebel' s theories and games lost their influence.

Key Words: Words: Religious spirituality in children, playing, courtesy, Froebel, childhood